新開地アートひろばニューあそび場の創造 vol.12

# 野原万里絵展
# 「絵画になるまで」

The New Place to Play vol.12

# Marie Nohara Solo Exhibition
# "Processes for paintings"

## ごあいさつ

新開地アートひろばでは、2023年度より自主事業企画「ニューあそび場の創造」を開催しています。本企画は、新開地アートひろば全体を「あそび場」と捉え、「あそべる作品」や「あそべる空間」をアーティストと協働して創造します。12回目となる今回は、野原万里絵展「絵画になるまで」を開催します。

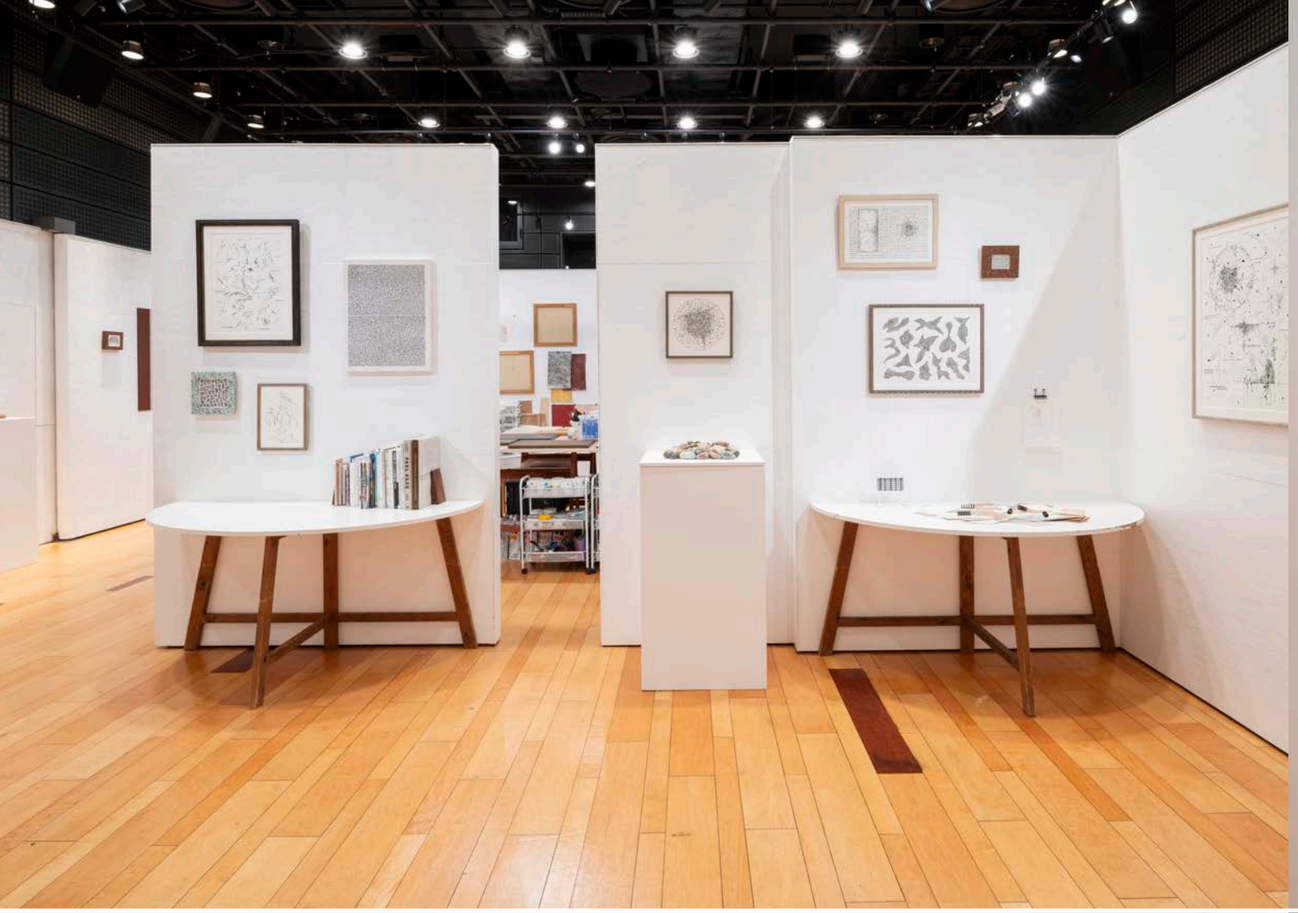
野原万里絵は、関西を中心に絵画領域で活躍する画家です。野原は絵画を描く際の感覚的かつ曖昧な制作過程に関心を持ち、自ら作った道具を用いて制作しています。

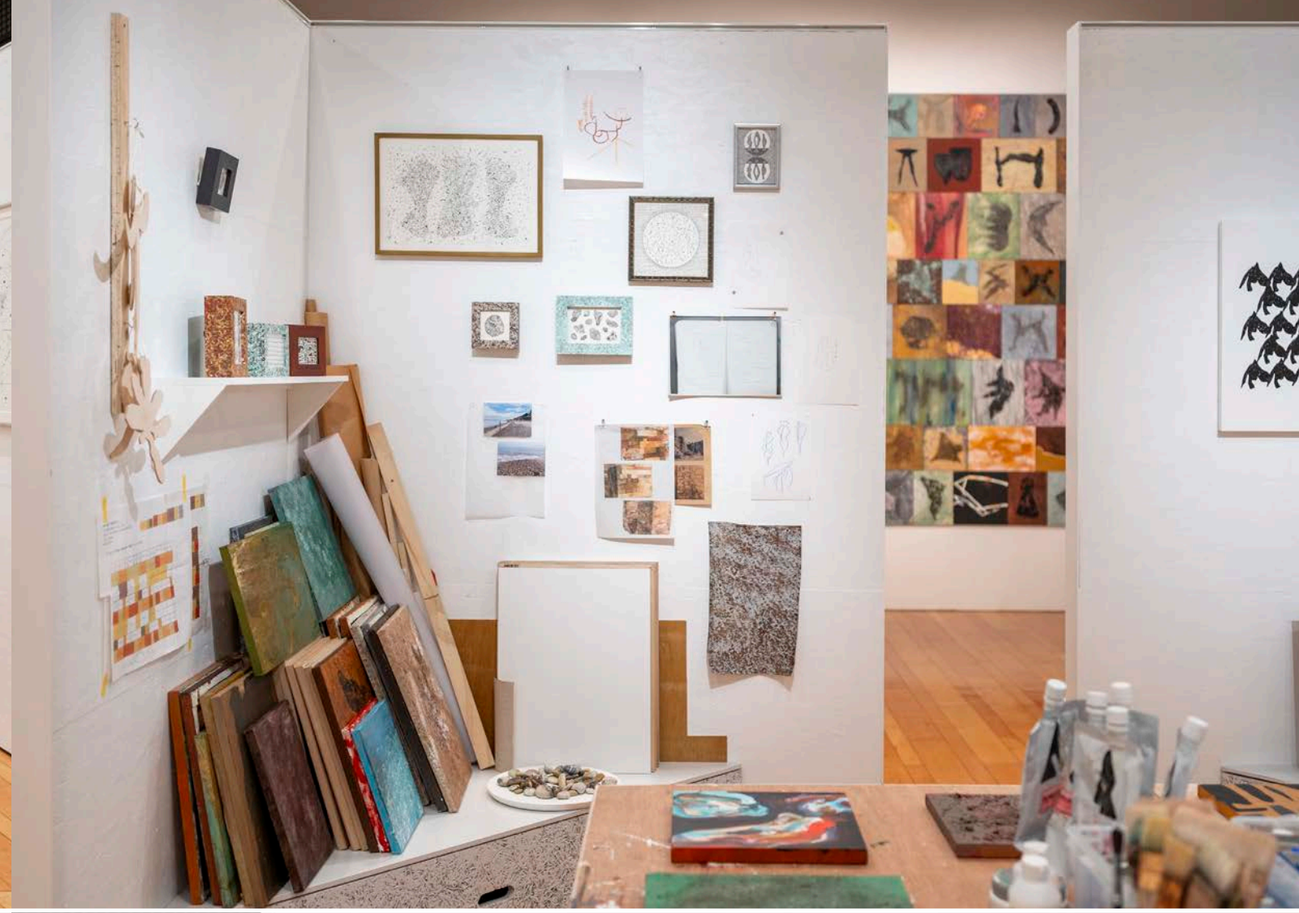
本展では、展示会場を野原のアトリエに見立て、普段表に出ることのない画家の考えや描き方といった制作過程に焦点を当てています。会期中は野原が会場に滞在し、青森や神戸市塩屋など日本各地の海岸で収集した石から着想を得て、絵画の一部を来場者と協働制作します。色彩豊かな石と絵の具を往復しながら、メインの絵画は日々描かれ、大きく展開していきます。さらに会場中央には、野原が愛用しているノートの一部や写真が再構成されて展示しています。作品の鑑賞を楽しむことは勿論、展示作品の制作過程についても想像してみてください。一つひとつの作品の制作過程を自分自身で組み立てて考えることは、創作の裏側に触れ、絵を描くことの楽しさや奥深さを知るきっかけとなるはずです。

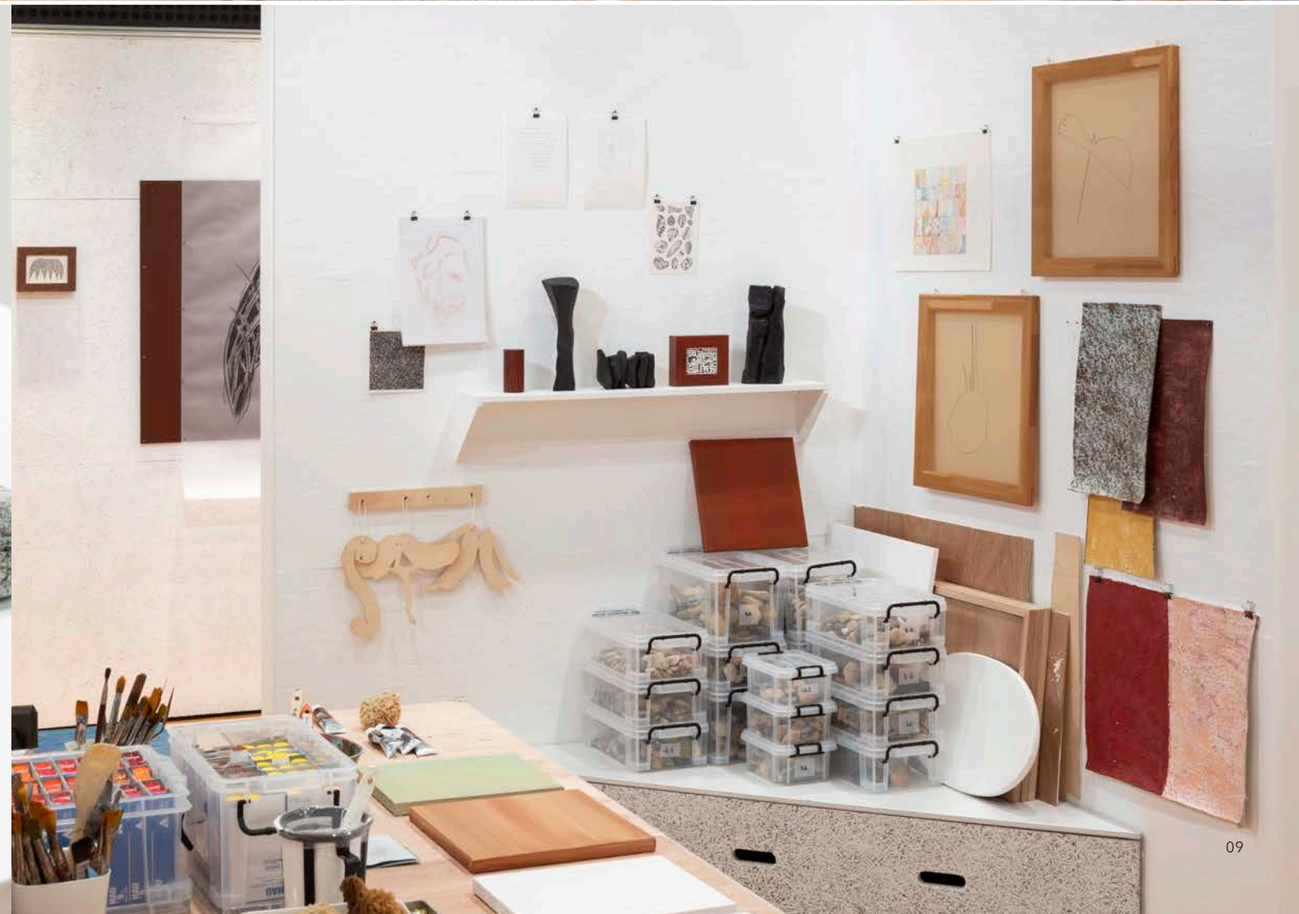
展示空間内にある手作りのスケッチブックは、自由に手に取り、描くことが出来ます。様々なサイズの紙や色、手触りから感覚的に選んでスケッチブックを作る作業は、野原の創作を追体験することにも通じるでしょう。

最後となりましたが、本展を開催するにあたり、惜しみないご尽力をたまわりました野原万里絵氏、ならびに本展にご協力、ご支援いただきました関係者のみなさまに心より御礼申し上げます。

2024年11月
新開地アートひろば







## 制作日誌

（テキスト：野原万里絵）

### 「海の石から大きな絵ができるまで」

インドの遺跡（クトゥブ・ミナール）の色彩から着想した絵画を、多くの人の手を介して制作する。2020年からはじめたシリーズで、絵画のパネルの組み合わせを変えながら展開している。鑑賞者が描く過程に参加することで、画家の手法や新たな鑑賞の視点に触れる機会とする。

**手順**

①遺跡のイメージに近い色彩豊かな石を、青森や京都、神戸市塩屋の海岸で収集する。

②参加者は、石のコレクションの中から描きたい石を1つ選択する。

③石の模様や色彩、質感を触りながら観察する。石のどの部分を表現するかを考える。

④木製パネルにキャンバスを張ったものの中から1つ選択。キャンバスのサイズ、下地の色、メディウムの有無を選ぶことができる。

⑤選んだ石から発想を広げて、アクリル絵具とメディウム、筆やペインティングナイフ、海綿等を用いてキャンバスに表現する。

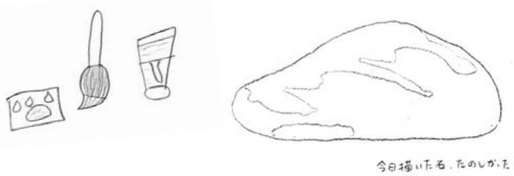
⑥完成したものの中から、今回の組み合わせに選んだものが、作品の一部として展示される。

**第1回 11月17日（日）AM　参加者6名**

・私にとっては約半年ぶりに行う協働制作。感覚を取り戻しつつ、ゆったりと観察する。描き始めは、各自が選んだ石の奥にある色彩を観察し、キャンバスに1層目を塗ってもらう。桃色・黄色・黄緑・水色と、各々に鮮やかな画面。作品の彩度の範囲について、考えを巡らせる初日。

・石探しピクニックにも来てくださった方も協働制作に参加。これまで何度も展覧会を観に来ている方だが、描く姿を見るのは初めて。自宅から細い紐を持って来たよと、白い絵の具を紐につけて石の模様を描いてくれる。意図しすぎない模様が紐で表現されていて、技術の高さに驚いた。

- たくさんの絵の具やふで道具などアートに触れる時間がとてもたのしかったです（コマツミスズ、モモカ）
- 青森の石を見つめさわることで石の表面の奥にあるものを想像しながら色をぬることが楽しかったです（Y.N）
- 石を見ながら描いているつもりなのに絵を描くことに集中して「石」の存在を忘れてしまいました。（和田直子）




**第2回 11月23日（土・祝）AM　参加者5名**

・初めてメディウム（モデリングペースト／コースパミス）を触る小学1年生。軽石のようなザラザラとした触感が気に入ったみたい。メディウムとアクリル絵具を混ぜて、ペインティングナイフで勢いよく混ぜる。まるで肉を捌く料理人のような姿。

・大人の絵と子どもの絵、並べてみると不思議と分からなくなる。子どもが大胆に小さな手のひらで勢いよく絵の具を伸ばした痕跡は、離れてみると人が描いたようには思えない。まるで自然現象のように描いてくれる。

**第3回 11月23日（土・祝）PM　参加者6名**

・ご近所の小学生、子どもたちが多く参加した日。お友だち2人は、同じ半透明の瑪瑙を描きたいとセレクト。同じ石を見ながら描く人は初めて。白っぽい石は描くことが難しいが、淡い紫やベージュの色を見つけ出し、2人とも豊かな色彩で丁寧に描いてくれた。友人同士でふらっと参加してくれた事も嬉しい。

・白っぽい石の模様を、大きく拡大して描く小学生。筆と海綿を駆使して、1人でどんどん描き進めていける様子。隣で観ながら静かに感心する。

- 好きな石を選んでその石をみながら色を選んでキャンバスに描く・・・3才の娘ができるか不安でしたが、大きな筆やスポンジで自由に楽しそうに描いている姿をみることが、とても嬉しかったです！ありがとうございました。（中村紗掬）
- 親子でがんばりましたー！！（上村美和、碧馬）
- 作家の先生と同じ空間で絵を描かせていただけた時間はとても貴重な時間でした。（山下悟）
- たのしかったよ（あきと、けいと）
- たのしくてせつめいもじょうずだったからいいさくひんができたし すごいほめてもらえたからまんぞくかんもあったしとてもたのしかった。またやりたい！いろんな人がいたのにたくさんおしえてもらっていろいろまんぞくした。♡（うーちゃん）
- 中学生になると、これをしたからびじゅつぶになりたいと思ったし すっごいたのしかったしめっちゃじかんがかかったけど キレイなえがかけたからまんぞくしました。（りゅららのあ）
- たのしすぎて、やる気アップした！しかもみんなほめてもらってすごくよかった！「またやりたいなぁ」っと思いました。（ここ）
- みんなきれいでアドバイスとかしてくれたしみんな友だちは、ざらざらよりつるつるをつかってたからこつとかなんかあるかなと思いました。（めいめい）

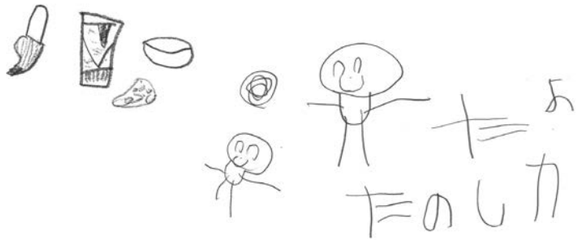
### 第４回 11月24日（日）AM　参加者６名

・１歳〜小学生のお子さんが参加し、賑やかな会。初めて描く石の色、ぴったりな色を作るのが難しいと、手が止まる小学生。「お料理で醤油や塩を少しずつ足すみたいに、絵の具の色も少しずつ筆の先で足してみて」とアドバイス。
・お母さんに抱っこされながら描く1歳のお子さん。筆を握っていたかと思うと、途中からは躊躇なく手で描く。絵の具が混ざるということ自体が面白い様子。

### 第５回 11月24日（日）PM　参加者５名

・絵の具の粘度の差、描き方のバリエーションが多い日。鮮やかな黄緑色を一層目に塗った方は、２層目には彩度の鈍い絵の具を水で薄く溶いたものを何回か重ねて、理想の色に近づける。海水が石の模様を作るように、水の使い方も大事。
・ねっとりとした絵の具を塗り重ねる方は、まるでチョコレートを伸ばすかのように、美味しそうな絵を描く。私には描けない、大胆で溌剌（はつらつ）とした作品が完成。

- すこし大変だったけど楽しかった（えんぴつ）
- つらかったけどたのしかった（なみこしらく）
- はじめてくらい色をつくったけど、じょーずにできてうれしいです。またきたいです。（西村知紗）
- 今日は、学校ではつかわないような画材をつかって絵をかいたのでいつもとはぜんぜんちがう絵がかけました。かいめんでえの具をポンポンするのが楽しかったです。それに、めったにつかわないような えのぐの色もたくさんありました。（みずき）
- あまり何も考えずに、でも頭の片すみでどうなんだろうと思っていましたが、石（青森の）と出会い、キャンバスと出会い、素材の声を聞くように、目で見て耳をすませて、色や道具を一つ一つ選んでいくと、時間の道が、うまれて気がついたら、自分にとって愛着のある景色ができていて、とても嬉しかったです。心と体がポカポカしていました。（林淳子）
- 絵心は全くないですが、参加して新しい体験ができてよかったです。施設利用は２回目で又機会があれば参加したいです。（YN）
- どんなことが始まるのだろうとギャラリー/アトリエにおりると、素敵な空間が広がっていました。絵の具をさわるのは何十年ぶり、ペインティングナイフなど初めて使う道具もあって、こわごわ、どきどき、わくわくできた体験でした。たいへん貴重な機会をありがとうございました。（HN）
- 自分の選んだ石の異なる表情や模様が見えてくるようになり、石の個性を感じる楽しい機会でした。ありがとうございました。（田中智之）



### 第６回 11月30日（土）AM　参加者６名

・アクリル絵具を、まるで油彩のように仕上げてくださる方。日頃から油彩を描かれるというお話しを聞いて納得。白黒のコントラストの強い石、全体ではどのように配置しようかと悩む。
・２時間の協働制作の中で、最後の方に突然、コツを掴んだような表情で描いてくれることがある。「今日来て良かったです。」ホクホクとした笑顔で帰られる姿を見届けられて、私も大変嬉しい。

### 第７回 11月30日（土）PM　参加者６名

・選んだ石に何をみるか。それぞれの物の見方を絵の具を通して知ることがおもしろい。その人が過去に経験したことが、短い時間の中で描かれる小さな絵の中に詰まっている。

- 今日描いた石、たのしかった！（コウレイエイ）
- 普段、絵を描くことはほとんどないので難しい！と思いながらも、楽しい時間を過ごすことができました。いつも正解はないと思いながらも正解を探しながら絵を描いてしまい、それがしんどかったのですが、今回の協働制作はみなさんに励ましてもらいながら楽しく描くことができました（中川恵理子）
- ワークショップに参加させて頂きありがとうございました。新鮮な気持ちになりました。特にお子さんのパワーと創造力は新鮮でした。（久保昌由）
- 色んな石があるのが不思議でその石をキャンバスに描く体験はとてもステキ！子供達も一緒に楽しい空間。今度自分でも石をさがしにどこかふらっと行ってみたい。（しずか）
- いろんなどうぐをつかえて楽しかった。石がおもしろいかたちだった。（市子）
- えのぐは、いろいろあっていろんな色があってまぜるとすごい色や、あわい色ができておもしろかった。バックに入っているやつがごつごつできるすなっぽいやつとかぎゃくにてかてかにできるものとかあってそれはユーチューブとかでしってたけれどさわったのがはじめてなので「こんなかんじなんだー」とおもって楽しかった。（あおい）
- 石がこんなにきれいと思ったのは初めてだったかもしれません。楽しい時間でした。（こうへい）
- 絵をかいて思ったことはどうぐがふでいがいにさんしごみたいなものとか、ペインティングナイフとかがあってびっくりしました。楽しかったです。（りいな）
- いろいろないしのもようがそれぞれちがうかった（響）
- 最初作品にさんかできるということがうれしくて、始めてみると楽しくて、またこんなワークショップがあったらさんかしたいです。ありがとうございます。（こころ）



### 第８回 12月１日（日）AM　参加者２名

・「ママはどの石が好き？」と、お互いに好きな石を見つけながら、じっくりと描く石を選ぶ女の子。初めての海綿に恐る恐る触ってみる。海綿を水に浸してぎゅっと絞り、自分で混ぜた桃色の絵の具をたっぷりつける。新たにスタンプされた桃色の隙間から、過去に誰かが描いた色の層がちらほら顔を出し、新たな画面として生まれ変わる。

### 第９回 12月１日（日）PM　参加者６名

・友人ご家族同士での参加。すでに下地が描かれているパネルを選択し、引っ掻き跡やゴツゴツしたメディウムを生かした表現に挑戦。制作中盤、よく遊びに来てくれる近所の小学生が、２作目の続きを描きに来た。慣れた手つきで描いてお喋りも弾む中、１作目とは別人かのように緑色の石の複雑な色を表現。本人も驚きの大成長。

- たくさんの石の中から自分のお気に入りを見つけてそれを絵にする姿を見ることが出来て良かった♡たのしかった♡（金山絵美、蓮禾）
- 石の絵をかくのがたのしかった。（レイ）
- 久しぶりに創作活動をしてとても楽しかったです。石の色や質感をじっくり観察しながら模写するような体験は、普段の生活から少しはなれたとてもよい時間になりました。（マリコ）
- 1日1日れんしゅうをして今日うまくかけたと思います。また1日1日れんしゅうをかさねてみんながおどろくさくひんを作りたいです。（さくら）
- せんせいありがとう（ナギ）

### 第10回 12月７日（土）AM　参加者６名

・大人３名+小学生３名の参加。石をじっくり観察し、黙々と色を作っては、少しずつ着実に塗り重ねていく小学生。それとは対照的に、勢いよく厚塗りを繰り返し、試行錯誤しながら描く大人の方々。２組の対比に思わず笑いが起きた。
・見えている色は人それぞれ。本人が思うような色で描けているのか、それとも色が合わせられずに悩んでいるのか、描く手つきを観察して声をかけてみる。

### 第11回 12月７日（土）PM　参加者３名

・どの色をどれくらい混ぜたら何色になるか、頭の中で混色がイメージできる人が、協働制作をしているとちらほら現れる。絵の具の使い方や好きな質感が似ている人を見つけると、自分が幼い頃を思い出す。

- むずかしかったけどやさしくおしえてくれました。いろいろなしゅるいのふでがあるので、書きやすかったです。いろんな色の絵具があってさいげんしやすかったです。（ここね）
- アクリル絵具もナイフも海綿もとにかく全部初めてなのでアドバイスいただきながらいい経験ができました。白が大事（山中一正）
- じょうずにできてうれしかったです。またいきたいなとおもいました。（岡本有桜）
- 二回目だけどやっぱりたのしかったです。このまえはおうど色でこんかいは赤色にしたけどちょっとむずかしかったです。（西村知紗）
- 絵の具をたくさん使えて、思うぞん分、描くことを楽しめました。（ナガちゃん）

### 第12回 12月８日（日）AM　参加者６名

・６歳以下のお子さんがたくさん参加してくれて、まるで保育園のような雰囲気。２歳のお子さんも臆することなく、握りやすい筆を選んで、白い画面に勢いよく線を描いてくれる。目の前の絵の具を混ぜると色が変わるということが、とにかく楽しい様子。
・勢いよく描く子どもたち、ふと目を離すと、まるで絵の具が波にさらわれたかのように、30分前に描いていた画面に逆戻り。幼稚園生らしい出来事。

### 第13回 12月８日（日）PM　参加者５名

・絵の具で線をどう描くかということは、私にもまだ難しい。塩屋の石は細い直線がたくさん入っていることが多く、青森の石にも時々見られる。線が多く入った石が選ばれた時は毎回、自分だったらどうするかと、先回りしながら考えを巡らせる。
・真っ白な石を描くことは難しいので、私はなかなか選ばないが、子どもたちは白い石を結構好む。今日描いてくれた大きめの白い石は、グリーンを爽やかに取り入れて、素敵な仕上がりだった。

- いし たのしかったです（Y・O）
- たのしかったよ！（ちーちゃん）
- 少し先生に近づけたかな？（Tex）
- いろいろな色を絵の具でぬれて楽しかった。石のがらと、色をよく見て書くのも楽しかった。（たまちゃん）
- 初めて本格的に絵が描けたので、楽しかったです。（T.N）
- いしがつるつるできもちかったです（さら）

**第14回 12月21日（土）AM　参加者7名**

・選んだ石を描き進めるにつれ、筆やペインティングナイフよりも、手や海綿で描く方が何故か石の印象に近づきやすい。石を手で触り、絵の具を手につけて描くことで、見る以上のことを得られるのかもしれない。

**第15回 12月21日（土）PM　参加者5名**

・午前中から参加してくれていた小学生のお子さんが、引き続き午後からも参加。お母さんも一緒に描きたいと参加してくれた。慣れた手つきで描く大学生の方の隣では、よく館内で見かける小学生も参加。幼い時からワークショップに参加したこともある身近な施設のようで、近所にこんな施設があるのは羨ましい。
・1日中参加してくれたご家族、小学生のお子さんは絵を描くことが本当に好きなようで、2作目も素晴らしい集中力を発揮して描いてくれた。

- 自分で選んだ「石」を自分の視点で描く。とても貴重な体験が出来てすごく楽しかったです！！絵具を使うのが久しぶりで、ワクワクしました。完成品も想像より満足できました。ありがとうございました！（おーぴー）
- 参加するまで、石を描くのが難しそうだと思っていましたが、たくさんの道具やメディウムを用意してくださっていたので工作気分で楽しむことが出来ました。WSで、キャンバスに描かせてもらうなんて初めてだったので、楽しかったです。（タカダミユキ）
- こどもと参加できて貴重な体験をありがとうございました！子どもの自由な感性にこちらも感心でした。（いく）
- たのしかった もーいっかいしたいです ぽんぽんたのしかった ぬりぬりたのしかった（ゆず）
- 色をつくるのが難しかった。ざらっとした感じのメディウムおもしろい つやけしで上から重ねる技法をおしえてもらって良かったです！（みか）
- こんなにもきれいで、おもしろい石が海岸に落ちているんだ！という驚きからその石を観察して色んな画材や色を使って描くのはとても楽しかったです。自然のつくり出す模様の魅力を改めて感じることができました！（ポコ）
- たのしかった。よくたのしくかけた。きれいにいめージできたいろをまぜるのがたのしかった。（ねねたろう）
- 絵の色をまぜるのがむずかしかった。（あこりん）
- まりえサンにアドバイスいただきながら使った事もない画材、はじめて聞く色をおしげもなく使わせてもらえてなんて贅沢！！なワークショップでした♡無心で海綿スポンジをポンポンして石をみてこの色かな？と考えて、、、夢中になって一種のヒーリングのような楽しい時間でした！親子で心に残る体験と時間をありがとうございます♡きっと人生を終える時走馬灯で今日の事を思い出します（笑）（はっちゃん）
- いろいろな絵がかけて、とっても楽しかったです。ツヤ出しメディウムや、ざらざらのメディウムなどの道具やそ材が使えてきちょうなたいけんが出来てよかったです。グラデーションを作りたい時に野原さんに「下地をかいてからしてみて」と言われてやってみたらいいかんじにできたのでよかったです。（すーちゃん）

**第16回 12月22日（日）AM　参加者4名**

・協働制作リピーターの小学生が多く参加。3回も参加してくれているお子さんも！スタッフの横山さんや岡村さんとお喋りしながら、今回描く最後の石を吟味。制作の流れを理解してくれているので、各々が工夫しながら新たな描き方を模索。これまで描いてくれた作品を見比べると、選んだ石が全然違っても、毎回の描き方には共通点がある。
・制作が終わって片付けていると、今日で最後だからと手描きの素敵なクリスマスカードのプレゼント。3回も一緒に描いてくれたお友だち、最終日は少し寂しそうな様子。また一緒に描こうね。

**第17回 12月22日（日）PM　参加者7名**

・協働制作と展覧会の最終日。鑑賞される方も多く、中心のアトリエも満員。ご家族3世代で参加してくれた方々も。互いの関係性や世代を越えて、小さな石と絵の具をきっかけに会話が交わされる。
・祖母と母と一緒に絵を描く経験をすることは、私を含め、ほとんどの人にないだろうなと制作風景を見ながら考える。今日は常連の小学生が、参加者の方の作品を見てアドバイスをしてくれたりと、子どもたちが大人の方々の絵を観て、声をかける姿が微笑ましい最終日だった。

- ご親切にご指導下さり有難うございました。色ぬりもとても楽しかったです。楽しいひとときを娘と孫と一緒に過ごすことができ感謝です。また次の機会を楽しみにしています。（戸田陽子）
- はじめてきてたのしかったです。またきてみたいです。（ともき）
- 絵の経験はないのですが、今回チャレンジしてとても楽しかったです。（K・K）
- 自分の一筆一筆が自然のあるいは地球の深いところへとつながる感覚がとても面白く心地よかったです。（M.H.）
- 石をじっくり観察できて、いろんな質感のメディウムをつかって、すごくわくわくしました！（K.I）
- 「描くことはなぜこんなにもおもしろいのだろう」とあらためて思った2時間でした。（K.A.）



## 遠くて長い、絵画になるまで

野原万里絵

絵を描く人というと、描きたいものが沢山ある人、絵が上手な人、小さい頃から絵が好きな人というように、ポジティブなイメージが多いように思う。

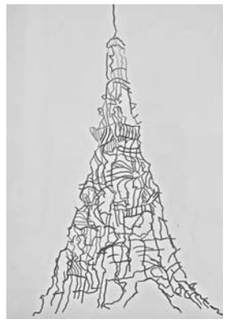
しかし私は、"何でも描いていい"という環境に置かれた大学生の頃、突然広がった自由を前に、何も描きたいものなんてなかったと、我に返った時期があった。キャンバスを目の前に、どんな線を引くべきか、何の形を描こうか、何色を塗ろうか、ということが全て白紙に戻ってしまったのだ。苦し紛れに油彩で描いた大阪の道頓堀の看板がひしめく風景は活気も何もなく、空っぽな絵が出来てしまったと、大学2回生の時に途方に暮れたことを覚えている。

当時、何を描くか、何のモチーフを選ぼうか、ということばかりに気をとられていた私は、ある時ふと、"何を描くか"ではなく、"どう描くか"が問題だ、という風に意識を変えていった。フリーハンドで線すら引けないのであれば、線を引く道具を作れば良いと、雲型定規を作ることにした。モチーフは何でも描けばいいからと、なぜかまた道頓堀に繰り出し、御堂筋沿いを何度も往復しては、気になった風景を写真に撮った。そして、何日もかけて撮影した写真を印刷し、その上にトレーシングペーパーを置いて、風景の輪郭線を鉛筆でトレースした。無心になぞられた数々の線は、フリーハンドでは描けないようなものばかりで、自分の足で歩いて見つけた線には、その日の思い出とともに愛着が湧いた。集められた線を繋げてデータ化し、近所のアクリル工場に出向いて、カーマインレッドのアクリル板にレーザーカットしてもらった。そのような工程を経て制作した《御道筋定規》(註1)によって、私は絵を描く一歩となる、線を描くということが再び出来るようになった。ちなみに、御道筋定規で初めて描いたモチーフは、東京タワー(註2)だ。

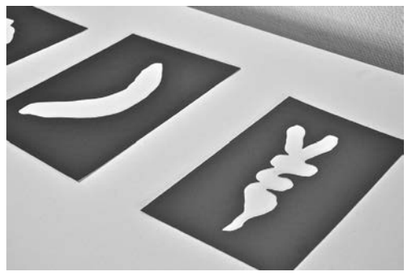
そのように、私にとって絵を描くまでの道のりは長く、描画道具をまずは制作するということから始まった。御道筋定規を制作した後は、甲子園定規、アメリカ定規、世界遺産定規、小須戸定規といったように、モチーフとなる土地を変えて、新たな線の組み合わせを模索した。

線について考えていると、次は面となる形をどう作ろうかということが課題となった。雲型定規を制作する時に端材として出ていた、抜いた方のアクリル板を眺めていた時に、次はこの抜いた形をメインにした型紙を作ってはどうかと考えるようになった。雲型定規の周囲を線でなぞるのではなく、定規の形を厚紙に切り抜き、形を面として使うのだ(註3)。そのような方法を2016年から取り入れ、黒い木炭粉や青い顔料の粉を型紙に擦り付けながら、木炭紙にステンシルをするように形を描き、大型の絵画を展開していった(註4)。この技法は、普段絵を描く機会が少ない人々にとっても難しくないことから、毎回15人ほどの参加者を募って、協働制作で描いていた。

註1：《御道筋定規 No.3》2009年、アクリル板



註2：《御道筋定規で描く、東京タワー（黄）》2009年、紙にペン



註3：型紙の一部

註4：《黒をめぐる話》2017年、紙に木炭、3.5×18.0m
新潟市新津美術館市民ギャラリー 展示風景

大人数での協働制作をすることに慣れてきた2020年、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が日本で確認された。参加予定であった国際芸術センター青森でのレジデンスが3ヶ月間延長され、この期間にレジデンスでやりたい事と改めて向き合うこととなった。木炭を用いてモノクロで絵画を描くことが数年続いていたこともあり、これを機会にアクリル絵具で色彩を豊富に取り入れたいと感じていた。アクリル絵具を用いての協働制作はこれまで行ったことがなかったが、当時の担当学芸員の金子由紀子さんと話し合い、参加者を1日5人までに限定して開催しようということにした。

そして、アクリル絵具を用いて描く作品のモチーフについて考えていると、2018年にインドに1ヶ月滞在した際に訪れた、首都デリーの南にあるクトゥブ・ミナール（Qutub Minar）のことを思い出した。そのミナレット（尖塔）は、1200年頃に建造が始まったイスラム建築であり、かつてインドで最も高いとされた石造の建築物である。私はその周辺にある門の建造物群を見た時に、日本では見たことのない、自然の石の色彩と配色の美しさに感銘を受けた。この色彩をどうにか持ち帰ることができたらと、写真にはおさまらないその光景を、目に焼き付けて帰ってきた。

その経験から、色彩について作品を展開するなら、インドで見た石の色彩をテーマにしたいと考え、レジデンス先の国際芸術センター青森のボランティアの方々の協力を得て、2020年9月からモチーフとなる石を集めに出かけた。津軽では、古くから錦石と呼ばれる美しい天然石が有名だと聞き、下北半島や陸奥湾、日本海側のありとあらゆる海岸に、石を探しに行った。人生初めての石探し、日本でも色彩豊かな石は拾えるのだろうかと不安を抱きながら巡ったが、何日もかけて様々な海岸に連れて行ってもらったおかげで、予想以上の数の石を収集できた。拾った小さな石には、インドで見た石に通じる心躍るような色彩が閉じ込められており、何時間でも眺めていられるような佇まいがあった。その石を協働制作ではモチーフにして、青森に住む26名の参加者と共に大型の絵画作品を制作した。

それから4年経ち、青森県で制作した石をモチーフにした作品を、再び新開地アートひろばで展開することになり、神戸市内にある塩屋でも石を探すことにした。塩屋海岸の石は、稲妻のような斜線模様の入った石が多く、他の地域では見たことがないものが予想外に発見できた。4年間で石を多く観察していたこともあり、新しく収集する時には、これまで描いたことのない石か、描き甲斐がある色彩や紋様、質感かといったように、見る目が肥えてきたように思うが、塩屋の石は多くを手に取りたくなる魅力があった。11月に開催した塩屋浜での「石探しピクニック」というイベントでも、参加者の方々が「塩屋駅から近い浜辺に、こんなに綺麗な石が落ちているとは知らなかった。」とおっしゃっていた。

そして、塩屋で収集した石も取り入れて、新開地アートひろばでの個展の準備がはじまった。今回の展覧会は、「ニューあそび場の創造」という通年の事業で、単に個展を開催するだけではなく、会期中に会場内で協働制作をしてほしいとの依頼があった。私はこの施設がまだ神戸アートビレッジセンター（KAVC）の頃、2013年と2018年に展覧会に参加しており、新開地の街に比較的馴染みがあった。施設内で人が行き交う空間をイメージしやすかったこともあり、協働で描く場をメインとした個展を開催することに決めた。

2023年4月の施設のリニューアル後に、ギャラリーはシアターがあった地下1階に移動していた。長い階段を下りて入ったギャラリーの天井を見上げると、以前と同じ黒色で、身体が上に引っ張られていきそうである。浮遊してしまいそうな感覚と、地下特有の音が遮断され、洞窟にいるような篭った感覚が入り混じった不思議な空間であった。上に引っ張られる浮遊感を、自身の作品でどうにか地面に重さを戻せたらと、2019年に奈良県明日香村で制作した、《拡張の方法〜無形の形〜》の作品のシリーズが頭に浮かび、入り口すぐに見える場所に展示することにした。

再びギャラリー内に目を向けると、低く白い壁が複雑な形状に組み合わされて立っていた。壁の材質は、約2種類の集成材に白のペンキが塗られていて、絵画を展示するにはなかなか主張の強い壁である。会場周囲の壁の他に、6つのL字型の移動式の壁も存在し、空間を迷路のように構成することも可能な作りとなっている。そして1番奥には、メインの協働制作の作品を展示できそうな高さ4メートルほどの白い壁が唯一あった。

そのような特徴的なギャラリーの設えを知ってから展示空間を考えることはおもしろく、他の施設では出来ないような構成にしたいと思った。展示空間の中心にL字型の壁を4つ使って仮設のアトリエをつくり、そこから外周の壁に向けて放射線状に作品を配置すれば、制作年の離れた作品の組み合わせや、テーマの異なった作品を隣同士に配置したりと、アトリエと展覧会のあいだにあるような空間ができると考えた。鑑賞の順路を決めずにランダムに作品を配置することにより、過去作を選ぶ自由度も上がり、これまで展示する機会が少なかった《静物画（フルーツ）のためのアトリエより、バナナ》や《木型のためのドローイング》のシリーズも展示することにした。そのように、2017年以降の作品と、現在の作品に影響の大きい2019年の作品に自身も久しぶりに対面する機会が生まれ、年数の割に長く経ったように感じる時間と、様々な種類の画材と格闘していた当時の記憶が蘇った。

また、多くの過去作を眺めながら、今回の新作を描きはじめたことで、《石の音》や《闇を照らす音02》、《積もる色彩》といったような、キャンバスに筆で描くペインティングを久しぶりに制作した。これまで、筆で描くということが性に合わずに、ペインティングナイフのみで描いたり、2021年以降はスクールペンにアクリル絵具をつけて描く方法でドローイングを多数描いてきたが、画材や描画道具に不自由な過去作の佇まいを眺めながら、そんな姿も悪くないなと、出番の少なかった細い筆を再び握って描いてみた。《生命体》にあるような、鋭く均一な線を素早く引きながら描くドローイングとは対照的に、ペインティングは、線の太さを緩やかに変化させ、ゆったりと考えながら描いていく。色や音から感じられる形や、形が生成される前の動きを伴った姿を、脳の動きをリアルタイムでなぞりながら筆で忠実に描いていくため、何度も補正しながら確かな形を追っていくドローイングよりも、生っぽい表現がペインティングでは残すことができる。気がつくと、本来のドローイングとペインティングの役割が、いつの間にか逆になっていた。

そのように、複数のドローイングとペインティングを描きながら、今回のメインである《知覚の標本03》の作品の協働制作も進めていった。この作品は、P10・F6・S6といったように、定型の木製パネル9種類の組み合わせで構成しており、高さが同じものであれば入れ替えが可能で、2020年から様々な展覧会で組み合わせを変化させながら展開してきた。パネルにはキャンバスが張ってあり、今回は施設のスタッフの方々にも協力してもらい、100枚超のキャンバス張りと下地塗りに追われる日々を過ごした。

そして会期中には、協働制作「海の石から大きな絵ができるまで」を開催し、最終的に91名の幅広い世代の方々が参加してくださった。協働制作では、年齢や経験に限らず誰もが平等に、作家と同じ画材を用いて描くということを大事にしており、今回は最年少の1歳児の参加もあった。描きたい石を1つ選び、その石の色や紋様、質感をアクリル絵具とメディウムで表現してもらうという工程は、何か心惹かれるきっかけがあれば、絵を観るだけではなく、描く行為に移行できるのではないかと思ったことがはじまりとしてある。そのきっかけとして選んだ小さな手にも収まる海の石は、どこでも拾えそうなものではなく、時間をかけて厳選した、作家である私自身が心躍る愛着のあるものである必要があった。

小さな石を観察しながら描いてもらうことは、視点を集中させやすいこと、有機的な形であること、一つとして同じものはなく、色彩が複雑な層で構成されている、ということが関係しているのか、参加者は自分の選んだ石を何度も手に取りながら、何をそこから自分は表現するかを各自が導き出してくれた。一見、絵だけを観ていたら気がつかない表現も、石と合わせて観ると、石のこの部分を抽出して描いていたのかと、腑に落ちることがある。

また、石の奥に潜む色についても想像を巡らせて色を塗ってほしいと伝えると、表面に出ている色からは想定できない色を一層目に塗る人もいる。石一つを挙げても着目する観点に個性が表れ、さらに描写する際には、完成イメージに達するための工程に、各々の普段の絵の見方が反映されているように思う。鑑賞するだけでは隠れていた絵に対する素直な考え方が、描くことによって露わになり、絵の具を通して伝わるその人の視点や性質は、言葉以上にストレートに表現される。

参加者の方々からは、「夢中になって一種のヒーリングのような時間だった」、「一筆一筆が、自然のあるいは地球の深いところへとつながる感覚がとても面白く心地よかった」、「つらかったけど楽しかった」、「楽しいひととき、娘と孫と一緒に過ごすことができ感謝です」とのお言葉をいただいた。ペインティングナイフや海綿を用いたり、メディウムを混ぜて新たな描き方に触れることで、絵の具が自分のものになっていく楽しさを体感してくださったと思える言葉だった。思い通りにならずに悩む人には、相手の考えにも添いながら、「石に波がザブーンとかかるように、薄く濁った色水を、絵全体にかけて彩度を落として」や、「料理で醤油や塩を少し足すように、白をほんの少し入れてみて」と具体的にイメージしやすいように、言葉に置き換えて細かく伝えることも行った。ほんの少しの工程を丁寧に追加することで、絵が品格を持って作品として立ち上がる瞬間を体感してもらいたかった。

そして、今回描いてもらった絵の中からセレクトしたものと過去作も組み合わせて、最終的に111枚の1作品に仕上げた。配置を決める際には、左端に位置する黒と桃色の2種類の絵（註5）が、隣同士に配置させると意外にも相性が良かった驚きから、一気にパネルの組み合わせを変化させることができた。

また、展覧会中盤に《知覚の標本03》を眺めていると、"同じ雨を浴びる"という言葉が、ふと思い浮かんだ。様々な人の手を経由しているにも関わらず、フラットに存在すること。石を起点とした複数の人の表現が、1つの塊として存在するには、アトリエ空間で過ごした数々の経験が絵の中に圧縮され、まるで長く同じ時間を共にしたかのような、目には見えない雨垂れが、絵にも染み込んでいる必要があるのだと気がついた。それは過去作にもあるような、"絵を横断するなんらかの線"と共通する考えがある。ドローイングの最後に完成の意味を込めて引く、一列に咲いた彼岸花の風景に由来する赤い十字や、木炭で描いた大作に横断する道路のような黒い太い線。一見バラバラに思える形には、常にそれらを繋ぐ1つの具体的なモチーフがあり、線があった。今回は、形として留めることの難しい"雨"というイメージを軸に持ち、同じ空間で経験を共にした時間の帯が、全体をなだらかに繋げてくれた作品として新たな展開となった。

註5：《知覚の標本03》制作途中

# 「絵画になるまで」を分析する

**青木加苗**（和歌山県立近代美術館 主査学芸員）

今回の野原万里絵展のタイトル「絵画になるまで」は、奇妙な謂だが、言い得て妙だ。「画家になるまで」「野球選手になるまで」という言い回しは自然だが、「ボールになるまで」とは言わないように、絵画も通常、「なる」ものではないとされているからだ。このワーディングは単に違和感を与えるだけでなく、それ自体が大きな問いでもある。主に平面として造形された美術作品である絵画は、その前提として、作り手によってイメージを生み出される対象だと思われているためだ。さらに絵画は鑑賞者の前におかれ、その中に何が描かれているか、あるいは何が意味されているかを検討される対象ともなる。よって「絵画ができるまで」ではなく、「絵画」という名詞に「なる」という自動詞と、範囲を示す「まで」を付した「絵画になるまで」という語のおそらく無意識的な組み合わせは、一般的な絵画に対する理解（誤解）を、作り手の目線から修正している。

つまり野原は、いや野原だけでなく多くの作り手には実感があるはずだが、絵画とは自分の手を使って生み出されたものであるにもかかわらず、どこか自分ではコントロールし切れないところがある事実に、人一倍、自覚的なはずだ。だからこそ野原は、絵画制作のプロセスに関心を持ってきたのであり、より細かく言えば、何があれば絵画になり得て、何が絵画になり得ないのか、あるいは絵画というものが自律的に立ち上がるには何が不可欠なのかを探し続けているのだろう。そして今回の展覧会には、それを詳らかにする要素が、たくさん詰まっているように私の目には映った。本稿ではその「なるまで」の要素を、野原の制作と本展を特徴づける要素から、段階的に考えてみたい。

## Factor 1：絵画のオリジナリティ

野原は、アーティストが特権的に有すると思われがちなオリジナリティというものを、盲目的に信じてはいない。そこには描けないという体験があったようだ。大学の基礎クラスを終え、自主制作の段階になって何を描けば良いのかわからなくなったという心境は、同じ大学で同じ専攻にいた私にとって、わかりすぎる感覚である。アーティストでもない私が勝手に重ね合わせて恐縮だが、手を動かすことが好きで、対象を描写するのがまずまず上手く、与えられた課題にさほど疑問を持たずとも描く楽しさに向き合えた者にとって、課題が与えられなくなるというのは、足元が揺らぐ事態である。そのとき、自発的かつ内発的な制作衝動や動機を見出せなければ、制作者ではあり続けられないと感じるからだ。

そのとき私は過去の制作者たちの声や思考に耳を傾け、結果、それ自体に興味を移したわけだが、野原は「何を描くか」ではなく「どう描くか」、あるいは自分が引く線や描くかたちを自問する方法を見出した。それはゼロからのオリジナリティの探求というよりも、他者との相対的な比較によって浮かび上がる自分の無意識を見つめ直すというアプローチだったはずだ。同じものを同じ道具を使って描いても、別の人間が描けば別のものが出来上がり、自分では作り出せない色やかたちが生み出される。絵画が絵画として自律的に立ち上がる感覚を確かめる第一歩は、オリジナリティへの留保によって導き出されている。

## Factor 2：他者の影響

ゼロから何かを生み出すのは、とても難しい、というよりも、あり得ない。そう書くと、アーティストの自発的なクリエイティビティを信じる人をがっかりさせるだろうか。しかし私たちは、日々何かを目にし、体験し、生きている。その一つひとつが、無意識的なれども、私たちの造形感覚に投影されていることは確かだ。

近年、野原は、美術館のコレクションと向き合う機会を得てきた。大阪府立江之子島文化芸術創造センター（enoco）で行われた大阪府20世紀美術コレクション展『彼我の絵鑑』（2021）や芦屋市立美術博物館での「時代の解凍」展（2023）において野原は、各館の所蔵作品から津高和一（1911–1995）と伊藤継郎（1907–1994）、そして山田正亮（1929–2010）の作品を選び、作品の制作過程を分析することによって、過去の作家と対話を試みた。

絵画の古典的な学習方法のひとつに、模写がある。明治の日本では臨画という科目も設けられた。線をなぞることはかたちを捉える良い学習方法ではあるのだが、現代においてそれを実践する人はまずいないし、大方は表面的なもので終わってしまいかねない。しかし線という基本的な造形要素であれ、色という複雑な要素であれ、描く手順をも観察し、また想像しながら、その思考とあわせて追体験することで、模写や分析は自らの血となり肉となる。

野原は、自身が選んだ画家たちの作品から、絵画におけるテクスチュアやマチエールを土台に具象から抽象的なかたちへと昇華されるプロセスや、反対に抽象的なかたちから具象的イメージが想起される可能性、さらには感覚的に見えて実際には理知的に確定された色彩の相互作用という効果など、自作へのヒントを多く手に入れたことだろう。

今回、展示室において9日間17回実施されたワークショップ「海の石から大きな絵ができるまで」では、野原が各地の海岸で拾い集めた石の数々から参加者がひとつ選んでじっくりと見つめ、アクリル絵具やさまざまな道具を用いてパネルに描き出す方法を、野原から直接学んだ。そこには普段は見過ごしてしまうものを観察するという、絵を描く行為の効能がある。対象は石という自然物であるが、その方法は、野原が先に物故作家の造形思考を分析したアプローチが、そのまま移行されている。

私自身、このワークショップの最後の回に参加する機会を得られてあらためて気づいた、興味深い事実がある。それは互いに他の参加者の活動が目に入ることで、自ずと受け合う刺激の影響は、われわれが思っている以上に大きいということだ。参加者の画面が、時に似通ったり、時に意識的に差異化を図ったりしながらも、明らかな影響関係を見せていた。そうした状況は、アーティストたちの制作動機の影響関係としても、より前向きに認められるべきではなかろうか。

## Factor 3：スタジオと環境

画材を手に取り、紙やキャンバスに向かうまでには、誰しも結構なエネルギーを要する。それは画家も同じである。描きたいと思ったときに描ける環境があるかどうか、言い換えればそうした環境を意識的に作り出し、描くハードルを下げるのが、絵をなりわいにするアーティストにとっての必須条件でもある。そのために彼らはスタジオという場を作って、描きたい衝動と実際に描く行為の間を直結させる環境を整える。

今回の展覧会で野原は、これまでに作った作品を展示するだけでなく、自分の制作環境をそのまま持ち込んだ。それは会場の制約があってのことでもあろうが、滞在制作やワークショップの指導を幾度も経験した野原が、上述のワークショップを展示室内で実施するという選択をしたのは興味深い。美術館などでの実技を伴うワークショップは通常、どこか別の部屋や、周囲が汚れても問題ない環境で行われることが多く、今回のように展示作品があるという環境は特別なものだ。それは野原自身が普段制作しているような環境が、参加者の創作にもプラス要因となると、感じ取っていたからだろう。

ちなみに野原もそうだろうが、アーティストのスタジオには、自作が掛けられていることが多い。収納場所の問題という要請もあるが、何も作品がない部屋で絵を描くのは、どうにも落ち着かないようだ。彼らは自分にとっての刺激として、作品や自分の関心があるものを周囲に散りばめる。そうした環境もまた、野原の絵画にとって必要な条件なのだろう。

## Factor 4：地域とアーティスト

現代美術の拠点であった神戸アートビレッジセンター（KAVC）が、2023年リニューアルして新開地アートひろばとなり、その自主企画事業が「ニューあそび場の創造」と名付けられた。その名の通り、招聘アーティストには展覧会に作品を出品するだけでなく、展覧会を契機としたあそびの創出が期待されている。

展覧会とは日常と地続きでありながらも、ハレの場である。それは謂わば、地域の祭りのようなものかもしれない。今回、展覧会の最終日に会場に足を運んだこともあり、すでに野原と親しくなったこどもと触れ合うことができた。また「てててパーク」と名付けられた主にこどもたち向けのフリースペースの黒板には、野原の名前と展覧会名がこどもたちの手書きの文字とイラストで記されてもいた。館内にはアーティストの存在を内包した緩やかな空気が流れつつ、入るためにお金やチケットを必要とするわけでもない、しかし非日常性を保った空間に、こどもや近隣の人たちがふらりと立ち寄れるという状況——それは地域のお寺や神社のような、ひとつのコミュニティの中心にも見えた。

地域にアーティストという存在がいることは、そのコミュニティへの大きな刺激となる。もちろん在住作家がいる意義も大きいが、野原のように滞在型や訪問型であっても良い。「風のような存在」と語ったのはたしか野原自身であったが、アーティストの到着を心待ちにし、地域住民で受け入れる空気を作り出している施設の存在は大きいだろう。KAVCのオープンから30年近くが経ち、行政やコミュニティ側だけでなく、アーティストの側にも、適度に地域に溶け込める居場所が必要となってきた。野原の制作にとっても、そうした場での体験は、貴重な気づきを与えたと思われる。

## Factor 5：「わからない」の創造性

さて最後に、もっとも興味深いシンクロニシティについて触れて、本稿を締め括ろう。展覧会最終日のアーティスト・トーク「石と人と絵」において、野原とトーク相手の私と、さらに会場の参加者が大きく同意したフレーズがある。それは、「絵に対して『わからない』と人は言うが、石を見て『わからない』と言う人はいない」というものだ。野原が石を描くのは、それ自体に蓄積された時間や歴史が、美的に昇華されているという事実にあるのだが、結果的に石とは、「わかる／わからない」の区分を無効にする身近なモチーフである。

一方、美術館に勤める私は、見ることへのハードルを感じる来館者や学校教員らに、作品でなくとも、石を見ても良いと伝えてきた。なぜならそれが作品を見る行為に劣るとは思えないからだ。しかし美術作品には何か特別な見方や経験が必要とされたり、あるいはルールを知らなければ味わったり、面白がったりできないと思われている節がある。美術館の展示室空間では、作品に正対して「見る」という行為が促され、ただ見ることは「作品鑑賞」という固い言葉に置き換えられてしまう。けれどもなぜ、わざわざ作品だけを見なければならないのか、という前提への疑いを、美術館を訪れることもたちから学んだのは私自身であった。

こどもたちが不思議だと感じて対象に眼を向けるとき、そこには好奇心に満ちた「わからない」が溢れている。「わからない」とは、もっとも創造性に開かれた状態を指すのだ、と彼らの視線が証明している。現時点で可能性が無限に広がっているという事実を示すその言葉を、野原自身、肯定的に捉えているだろう。

そして本展タイトルにある「絵画になる」とは、制作時の自然な感覚を伝えつつも、野原自身がもっとも「わからない」と疑問を抱く状況でもあるのだろう。だから描く行為はそれを一つずつ分析して、確かめるプロセスでもある。本稿ではその言葉に滲み出る視点を探るために本展を特徴づける要素を探していったが、この展覧会自体が、画家ではない私たちにも創造的な「わからない」と出会う機会を、さまざまに開いてくれる場となった。

## 絵を描くことを通して、本質に触れる

**横山春乃**（新開地アートひろば）

今回12回目となる当館の自主事業企画「ニューあそび場の創造」では、画家の野原万里絵を迎え、個展「絵画になるまで」を開催した。本展では、完成された作品だけでなく、その制作過程や他者との協力によって、作品が生まれる過程にも焦点を当てた。野原の制作背景に触れることで、絵を描く楽しさや奥深さを体験してもらうことを目的とした。

自主事業企画「ニューあそび場の創造」とは、新開地アートひろば全体をあそび場と捉え、「あそべる作品」や「あそべる空間」をアーティストと協働で創造することをコンセプトとしている当館の通年事業だ。当館の前身である神戸アートビレッジセンター（KAVC）では、美術や演劇、音楽、ダンスなど様々なジャンルの展覧会や公演を数多く開催してきた。その実績を引き継ぎ2023年4月に施設の名称を変更し、リニューアルオープンした。

リニューアル後、職員の事務所が1階に移動し、隣には未就学児から小学生までの子どもたちが利用できるスペース「てててパーク」ができた。子どもたちが入りやすいスペースが追加されたことによって、平日の夕方などは、近所に住む小学生たちが、学校を終えてから施設に遊びに来るようになった。

この「てててパーク」には、大きな黒板が設置されている。1階を利用していると、必ず目に入る大きさだ。本展開催前に野原から「この黒板に、職員主導で子どもたちと一緒に絵を描いてはどうか？」と提案を受けた。その提案は、子どもたちの絵や字で展覧会を伝えていく壁として利用するというものだった。さらにこの時「鑑賞者が制作者になったり、展覧会を作る一員になったりと、皆が当事者になっていくことがあそび場を作る上で重要ではないか」と問いかけがあった。

これまで私は、施設の利用者と業務以外で言葉をかわすことはほとんどなかった。ある日、思い切って遊びにやって来る小学生グループに声をかけた。すると、最初の緊張が嘘のように、子どもたちからは快い反応が返ってきた。(註1)

それ以来、顔を見たら声をかけるようになった。子どもたちは、熱中しているゲームの話や最近飼い出した猫の話などを教えてくれた。小さな変化だが、野原の展覧会をきっかけに始まった関係性である。

これを機に、1階は職員主導で絵を描くコーナーを作ることにした。「てててパーク」の黒板の他、フリースペースには、誰でも自由に石を触りながらスケッチ出来るコーナーを設置した。(註2)

2024年11月17日（日）から12月22日（日）のおよそ1カ月開催した本展は、展示会場を野原のアトリエに見立て、作品の展示だけなく、来場者との制作スペースを会場の中央に設けた。展覧会初日から早速協働制作も始まり、小学生の女の子が飛び入りで参加してくれた。この女の子は、1階のスペースに石の展示コーナーを準備していた時に、一緒に手伝ってくれた子だった。展覧会全体を通して、開催前から交流していた子どもたちが、ふらっと訪れてくれたことは、思いがけず嬉しい出来事だった。

本展では作品を「みる」だけでなく、創作者の立場となり「描く」ことも展覧会の重要な要素として捉えた。特に会期中の協働制作は、参加者にとって画家の仕事を目の当たりにする貴重な体験であっただろう。

協働制作のモチーフは、野原が日本各地の海岸で集めた石だった。参加者は、自分で選んだ石をよく観察し、色や質感、模様をキャンバスに着彩していった。野原は、参加者の年齢や気質に応じて、絵のクオリティーを常に見極めていた。色の作り方にしても、時にはモチーフの石と同じ色になるようこだわった。石の表面に見えている色だけでなく、その奥にある色についても注意深く見るよう促した。野原は参加者の持つ力を、協働制作の限られた時間の中で、最大限引き出すように導いていた。描いている最中の主導権は、野原と参加者の間を行ったり来たりしていた。完成した作品は、野原の作品として発表される。111枚のキャンバスで構成された1作の大きな絵画は、様々な人の手によって描かれた石の要素が凝縮されている。

青木加苗氏もアーティスト・トークで触れていたが、「描く」ことは「みる」ことの勉強になる。「みる」ことは、ただ表面をなぞるだけではない。その奥にあるものにも触れる行為だ。「描く」ことは、そのプロセスを自ずと実践させる。

本展では作品を「みる」だけでなく、実際に絵を「描く」ことで、画家の創作の道筋を辿った。この体験をきっかけに、絵の見方が今までと違うものになれば幸いだ。

そして本展は、野原の導きがあったからこそ、絵の描く楽しさや奥深さを実感してもらうことができた。野原の画家としての視点や技術が、来場者にとって新しい視点をもたらし、絵を描く過程そのものがとても魅力的なものに感じられたことだろう。来場者にとって、単に絵を描くことに留まらず、ものを観察する力や創造する力を養う貴重な時間であったに違いない。

註1：
近所に住む小学生たちと職員が大きな黒板に絵を描く。

註2：
1階フリースペースに設置した塩屋の海岸で見つけた石の展示コーナー。

## 作品リスト（制作年順）

**かたちの収蔵庫より、直線01**
糸、オーガンジー、木枠
2017
410×410mm

**かたちの収蔵庫より、直線02**
糸、オーガンジー、木枠
2017
455×455mm

**かたちの収蔵庫より、直線03**
糸、オーガンジー、木枠
2017
455×455mm

**静物画（フルーツ）のためのアトリエより、バナナ02**
ペンキ、綿布、パネル
2019
540×383mm

**静物画（フルーツ）のためのアトリエより、バナナ04**
ペンキ、綿布、パネル
2019
544×381mm

**木型のためのドローイング01**
ボールペン、紙
2019
310×232mm

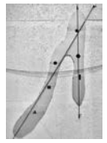
**木型のためのドローイング02**
ボールペン、紙
2019
232×310mm

**木型のためのドローイング03**
ボールペン、紙
2019
393×545mm

**木型のためのドローイング04**
ペン、色鉛筆、紙
2019
390×547mm

**木型のためのドローイング05**
ボールペン、紙
2019
393×545mm

**木型のためのドローイング06**
ペン、色鉛筆、紙
2019
390×547mm



**絵画のための木型(P-A-01-W)**
ペン、木、紐
2019, 2024
1,582×1,434mm

**拡張の方法～無形の形06～**
ペンキ、ティッシュ、紙テープ、綿布、寒冷紗
2019, 2024
1,609×1,355mm

**拡張の方法～無形の形07～**
ペンキ、ティッシュ、紙テープ、綿布、寒冷紗
2019, 2024
1,569×1,399mm

**Drawing_2020_03**
アクリル絵具、色鉛筆、紙
2020
393×545mm

**計測のペインティング03**
アクリル絵具、色鉛筆、パネル
2020
227×227mm

**黒の立体**
**-計測のドローイングより-**
アクリル絵具、スタイロフォーム
2020
サイズ可変

**青森のドローイング08**
鉛筆、紙
2021
204×254mm

**青森のドローイング16**
インク、紙
2021
202×252mm

**望遠鏡の先に02**
インク、紙
2021
150×103mm

**Drawing 2022-03**
インク、紙
2022
202×252mm

**知覚の標本02のためのレッスン02**
色鉛筆、紙
2022
565×765mm

**漁業について**
アクリル絵具、紙
2022
298×210mm

**花器**
アクリル絵具、紙
2022
288×379mm

**彫刻からの描写**
アクリル絵具、紙
2022
150×106mm

**水草の浮かぶ水面01**
アクリル絵具、紙
2022
202×250mm

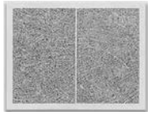
**水草の浮かぶ水面02**
アクリル絵具、紙
2022
202×250mm

**文字以前02**
アクリル絵具、紙
2022
365×257mm

**重力**
アクリル絵具、紙
2022
378×286mm

**引力02**
アクリル絵具、紙
2022
250×250mm

**石積みに刻む**
アクリル絵具、紙
2022
298×212mm



**Note：water plant**
アクリル、キャンバス、パネル
2022
411×531mm

**Note：language**
アクリル、キャンバス、パネル
2022
531×411mm

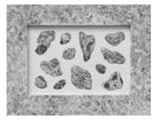
**漂流物02**
アクリル絵具、紙
2022
202×254mm

**九段下より 01**
アクリル絵具、紙、額縁
2022, 2024
247×300×15mm

**狂気と秩序02**
アクリル絵具、紙、額縁
2022, 2024
225×275×22mm

**石積みに刻む02**
アクリル絵具、紙
2023
420×345mm

**文字以前 05**
アクリル、紙、額縁
2023
168×196×21mm



**石を囲む 03**
アクリル、紙、額縁
2023
154×198×33mm

**文字以前 04**
アクリル絵具、紙、額縁
2023
148×168×20mm

**拡声器**
アクリル絵具、紙、額縁
2023
171×120×35mm

**牛**
アクリル絵具、紙、額縁
2023
171×120×35mm

**砂遊び 03**
アクリル絵具、紙、額縁
2023
148×198×33mm

**水面02**
アクリル絵具、紙、額縁
2023
168×168×20mm

**青森の石一つ#14**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
125×125×17mm

**ダンス**
アクリル絵具、紙
2024
422×298mm

**石を囲む 05**
アクリル絵具、紙
2024
201×254mm

**陣地01**
アクリル絵具、紙
2024
295×420mm

**Sound X 01**
アクリル絵具、紙
2024
105×152mm

**Sound X 02**
アクリル絵具、紙
2024
120×178mm

**Sound X 03**
アクリル絵具、紙
2024
508×392mm

**植物**
アクリル絵具、紙
2024
212×262mm

**サーカス**
アクリル絵具、紙
2024
242×300mm

**細胞分裂01**
アクリル絵具、紙
2024
300×300mm

**窓**
アクリル絵具、紙
2024
252×200mm

**夜空**
アクリル絵具、紙
2024
288×380mm

**飛散**
アクリル絵具、紙
2024
300×421mm

**こんがらがる人**
アクリル絵具、紙
2024
253×200mm

**石の観察02**
アクリル絵具、紙
2024
543×420mm

**生成の過程01**
アクリル絵具、紙
2024
656×508mm

**嘆く人**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
270×225×22mm

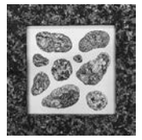
**知恵の木**
アクリル絵具、紙
2024
295×210mm

**型紙のためのドローイング01**
アクリル絵具、紙
2024
242×300mm

**解体と構築03**
アクリル絵具、紙
2024
725×543mm

**塩屋の石01**
アクリル絵具、紙
2024
68×68mm

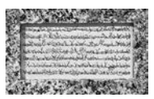
**塩屋の石02**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
135×165×33mm



**青森の赤い石**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
160×160×53mm

**塩屋の石04**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
183×183×48mm

**塩屋の石05**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
120×120×30mm



**Sound X 04**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
115×90×40mm

**暗号01**
アクリル絵具、紙
2024
80×97mm

**砂遊び05**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
152×197×33mm

**砂遊び06**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
152×197×33mm

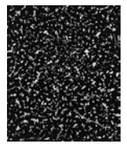
**砂遊び07**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
155×206×33mm

**浮遊**
アクリル絵具、紙、額縁
2024
200×200×20mm

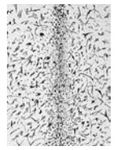
**またたき**
アクリル絵具、紙
2024
198×198mm

**生命体**
アクリル絵具、紙
2024
392×508mm

**石の音**
アクリル絵具、キャンバス、パネル
2024
320×412mm



**闇を照らす音02**
アクリル絵具、キャンバス、パネル
2024
730×605mm



**積もる色彩**
アクリル絵具、キャンバス、パネル
2024
730×530mm

**線のレッスン05**
木炭、チョーク、トレーシングペーパー、ペンキ、板
2024
1,369×1,822mm

**知覚の標本03**
アクリル絵具、木炭粉、キャンバス、パネル
2024
2,660×4,500mm

その他、タイトル表記のないドローイング等は、全て無題

## 野原万里絵（のはらまりえ）

1987年　大阪府生まれ
2011年　京都市立芸術大学美術学部美術科油画専攻卒業
2012年　Royal College of Art（Visual Communication）交換留学
2013年　京都市立芸術大学大学院 美術研究科絵画専攻（油画）修了

### [ 展覧会 ]

2024年　Kyoto Art for Tomorrow 2025 ー京都府新鋭選抜展ー / 京都文化博物館 / 京都
Window Gallery in Marunouchi ー from AATM vol.2 / 行幸地下ギャラリー / 東京
ニューあそび場の創造 vol.12 野原万里絵展「絵画になるまで」 / 新開地アートひろば / 兵庫
野原万里絵 ドローイング展「洞の絵」/ city gallery 2320 / 兵庫

2023年　art resonance vol.01「時代の解凍」/ 芦屋市立美術博物館 / 兵庫
ホルベインスカラシップ成果展 2023 / N&A Art SITE / 東京
Kyoto Art for Tomorrow 2023 ー京都府新鋭選抜展ー / 京都文化博物館 / 京都
個展「残映を編む」/ イチノジュウニのヨン / 大阪

2022年　野原万里絵 ドローイング展「雑景のパターン」/ 千鳥文化ホール / 大阪
千島土地コレクション「TIDE – 潮流（タイド）が形（フォーム）になるとき –」/ kagoo / 大阪
VOCA 展 2022 現代美術の展望―新しい平面の作家たち― / 上野の森美術館 / 東京

2021年　中区文化の通り現代美術祭 2021「００MHZ：振動する境界」/ Around Ulsan / 蔚山・韓国
Hikarie Contemporary Art Eye vol.15 3人のキュレーション「美術の未来」/ 渋谷ヒカリエ 8 / CUBE1,2,3 / 東京
大阪府２０世紀美術コレクション展「彼我の絵鑑」/ 大阪府立江之子島文化芸術創造センター (enoco) / 大阪

2020年　個展「埋没する形象、組み変わる景色」/ 青森公立大学国際芸術センター青森 / 青森
個展「途中は案外美しい」/ 枚方市立御殿山生涯学習美術センター / 大阪
「整頓された混乱」/ gallery TOWED / 東京
「ICAPU 2020 (International Contemporary Art Project Ulsan)」/ Wall Gallery / 蔚山・韓国

2019年　飛鳥アートヴィレッジ 2019 展覧会「回遊 Round Trip」/ 奈良県立万葉文化館 展望ロビー / 奈良
ワークショップ・展示「いろんな道具で描く、どこまでも長く、ずっと続く絵」/ トーキョーアーツアンドスペースレジデンシー / 東京
「ゆいぽーと アーティスト・イン・レジデンス 招聘プログラム 2019 春季」成果展 / ゆいぽーと（新潟市芸術創造村・国際青少年センター）/ 新潟

2018年　「Where are you taking us to?」/ Space one / ソウル・韓国
「絵画の現在地」/ 500m美術館 / 北海道
ワーショップ成果展「モノクロームレクリエーション」/ 神戸アートビレッジセンター / 兵庫

2017年　個展「□△も積もれば◯となる」/ あまらぶアートラボ(A-Lab) / 兵庫
下町芸術祭 2017「Dialogue on the Borderline」/ 駒ケ林町１丁目南部長屋 / 兵庫
個展「黒をめぐる話」/ 新潟市新津美術館 市民ギャラリー / 新潟
「小須戸アートプロジェクト2017」/ 町屋ギャラリー薩摩屋 , CAFE GEORG, 町屋カフェわかば / 新潟
「Arts in Bunkacho トキメキが、爆発だ」/ 文化庁 / 東京
「群馬青年ビエンナーレ2017」/ 群馬県立近代美術館 / 群馬

2016年　「小須戸アートプロジェクト2016」/ 町屋ギャラリー薩摩屋 , CAFE GEORG, 栄森酒店 / 新潟
第５回新鋭作家展「型にハマってるワタシたち」/ 川口市立アートギャラリーアトリア / 埼玉

2015年　「小須戸アートプロジェクト2015」/ 町屋ギャラリー薩摩屋 , CAFE GEORG, 町屋カフェわかば / 新潟
Public Art Research Center [ PARC 4 : Open Studio ] 公開制作 / 札幌駅前通地下歩行空間 | 札幌駅前イベントスペース / 北海道

2014年　アーティストの招聘による多角的なワークショップなどを通じた新進芸術家育成事業 ARTIST WORKSHOP @KCUA「CITY IN MEMORY - 記憶の街 -」/ 堀川団地 / 京都

2013年　若手芸術家・キュレーター支援企画 1 floor 2013「黄色地に銀のクマ ∪ スーパーホームパーティー」/ 神戸アートビレッジセンター / 兵庫
「a.a.t.m 2013 フランス大使館賞受賞記念展覧会」/ 日仏会館 / 東京
「ART IN THE OFFICE 2013」/ マネックス証券プレスルーム / 東京
「アートアワードトーキョー丸の内 2013」/ 行幸地下ギャラリー / 東京
「Toyonaka Joint Factory - 豊中共同製作所 -」/ 豊中市民ギャラリー / 大阪
「京都市立芸術大学作品展 2013」/ 京都市立芸術大学アトリエ棟 / 京都

### [ ワークショップ,その他 ]

2024年　ニューあそび場の創造 vol.12 関連 協働制作「海の石から大きな絵ができるまで」/ 新開地アートひろば / 兵庫
ニューあそび場の創造 vol.12 関連イベント「石探しピクニック」/ 塩屋浜 / 兵庫
ワークショップ「学校にかくれた形でつくる、ステンドガラスもよう」/ 泉南市立一丘小学校 / 大阪
ワークショップ「石図鑑をつくろう」/ 泉南市立一丘小学校 / 大阪
ワークショップ「今日だけのトイレットペーパー遊び in ぞうさんクラブ」/ 御池台地域会館 / 大阪
ART OSAKA 2024 / 大阪市中之島公会堂 / 大阪

2023年　ワークショップ「ダンボール板で額縁を作ろう」/ 三原台こども園 / 大阪
art resonance vol.01「時代の解凍」展 関連ワークショップ「記憶の色図鑑づくり」/ 芦屋市立美術博物館 / 兵庫
滞在型インキュベータ施設「toberu」にてレクチャー＋ワークショップ / toberu1 / 京都
SSK Art Fair & Open Studio 2023 / Super Studio Kitakagaya / 大阪
Worlds Within -Contemporary art from Japan- University of Cambridg / Art at the Alison Richard Building / 英国
滞在型インキュベータ施設「toberu」にて作品展示 / toberu1,2 / 京都
冬のA-LAB GO＋ワークショップ「デッサンのキホン！」/ 尼崎市立大庄北生涯学習プラザ / 兵庫
冬のA-LAB GO＋ワークショップ「デッサンのキホン！」/ 尼崎市立中央北生涯学習プラザ / 兵庫
ワークショップ「石図鑑をつくろう」/ 阪南市立桃の木台小学校 / 大阪
ワークショップ「石図鑑をつくろう」/ 阪南市立朝日小学校 / 大阪

2022年　ワークショップ「教室に潜む形で作る、ステンドガラス模様」/ 泉佐野市立第三小学校 / 大阪
ワークショップ「学校で見つけたふしぎな形でつくる自分だけのてぬぐい」/ 木津川市立南加茂台小学校 / 京都
ワークショップ「ダンボール板で額縁をつくろう」/ 大阪府立江之子島文化芸術創造センター(enoco) / 大阪
Open Studio 2022 Autumn「Life to Life」/ Super Studio Kitakagaya / 大阪
ワークショップ A-LAB GO+「津軽の石図鑑をつくろう」/ 尼崎市立小田南生涯学習プラザ / 兵庫
SSK Art Fair Collaborated with 山中suplex「の、あとのふね」/ Super Studio Kitakagaya / 大阪
「enoco オープンアトリエ 2022GW」企画・展示協力 / 大阪府立江之子島文化芸術創造センター (enoco) / 大阪
「こどもアート学科 2021 作品展と、大阪府 20 世紀美術コレクション」企画・展示協力 / 大阪府立江之子島文化芸術創造センター (enoco) / 大阪

2021年　ワークショップ「教室に潜む形で作る、ステンドガラス模様」/ 阪南市立下荘小学校 / 大阪
「Open Studio 2021 Autumn」/ Super Studio Kitakagaya / 大阪
ワークショップ「学校で見つけたふしぎな形でつくる自分だけのてぬぐい」/ 宇治市立西大久保小学校 / 京都
enoco オープンアトリエ ワークショップ企画「ダンボール板で額縁をつくろう」/ 大阪府立江之子島文化芸術創造センター (enoco) / 大阪
ワークショップ「学校で見つけたふしぎな形でつくる自分だけのてぬぐい」/ 京都府聾学校 / 京都
enoco こどもアート学科 2021 通信制ワークショップ「５ヶ月の絵日記箱」/ 大阪府立江之子島文化芸術創造センター (enoco) / 大阪
「HOLBEIN ART FAIR 2021」/ 渋谷スクランブルスクエア 14 階 +ART GALLERY / 東京
ワークショップ ART ROOMS TOYONAKA「作品の端材でブローチづくり」/ 庄内WEST ホール / 大阪
「Open Studio 2021 Spring」/ Super Studio Kitakagaya / 大阪

2020年　オンラインワークショップ「お気に入りの額を作って家にかざろう」/ 和泉市立青葉はつが野小学校 / 大阪
ワークショップ「小学校の思い出図鑑をつくろう」/ 大阪市立桃陽小学校 / 大阪
「Online Open Studio vol.1」/ Super Studio Kitakagaya / 大阪
enoco の学校「こどもアート学科」ワークショップ講師 / 大阪府立江之子島文化芸術創造センター (enoco) / 大阪
A-Lab@Home #11 ワークショップ動画「家を彩る絵、手作りの額」/ 兵庫県尼崎市の公式 YouTube あまがさき文化芸術情報局にて配信
おうちでアート ワークショップ動画「おうち図鑑をつくろう」、「アーティスト紹介」/ 大阪府豊中市の公式 YouTube とよなかチャンネルにて配信

2019年　enoco の学校「こどもアート学科」ワークショップ講師 / 大阪府立江之子島文化芸術創造センター (enoco) / 大阪
ワークショップ「ふしぎな道具で絵を描く１日」「見たことのない、絵を描く道具をつくる２日間」/ ゆいぽーと（新潟市芸術創造村・国際青少年センター）/ 新潟
ワークショップ「図工室にある不思議な形を集めて手ぬぐいを作ろう」/ 大阪市立酉島小学校 / 大阪



2018年　ワークショップ「炭とパンで絵を描こう for キッズ」/ 神戸アートビレッジセンター / 兵庫
ミュージアムエデュケーション研究会 みんなの学び場　ワークショップ「炭とパンで絵を描こう！」/ 神戸アートビレッジセンター / 兵庫

2017年　「3331 Art Fair 2017 -Various Collectors Prizes-」/ アーツ千代田 3331 / 東京

2016年　ミュージアムパーティー「５＋５ Presentation」/ 国立国際美術館 / 大阪
小須戸アートプロジェクト2016 関連ワークショップ「パンと炭で描く、小須戸のかたち」/ 町屋ギャラリー薩摩屋 / 新潟
第５回新鋭作家展「型にハマってるワタシたち」関連ワークショップ「パンと炭で巨大壁画に挑戦！」/ 川口市立アートギャラリーアトリア / 埼玉

2015年　京都市立芸術大学 × ホテルグランヴィア大阪 アートワークスプロジェクト / ホテルグランヴィア大阪

2013年　KAVC 倶楽部のひとつぼワークショップ「スーパーホーム建築」/ 神戸アートビレッジセンター / 兵庫

### [ レジデンス ]

2021年　国際芸術センター青森（ACAC）に２週間の自主滞在

2020年　「OPEN CALL : CALL for OPEN」国際芸術センター青森（ACAC）にて３ヶ月のレジデンス

2019年　「飛鳥アートヴィレッジ 2019」/ 奈良県明日香村にて３ヶ月のレジデンス
「ゆいぽーと アーティスト・イン・レジデンス 招聘プログラム 2019 春季」/ ゆいぽーと（新潟市芸術創造村・国際青少年センター）にて３ヶ月のレジデンス

2018年　西インドの工房を調査（Maharana studio, Swami Art, ジャイプールの木版更紗工房などに１ヶ月の滞在）

2015, 2018年　「さっぽろ天神山アートスタジオ」にて滞在制作 / 北海道

2015〜2017年　「小須戸アートプロジェクト」町屋ギャラリー薩摩屋にて滞在制作 / 新潟

### [ コミッションワーク ]

2024年　千島土地株式会社　本社１階北側外壁　作品恒久設置 / 大阪　協力：タカラスタンダード株式会社

2022年　九段会館テラス ビジネスエアポート九段下（地下１階・１階）作品恒久設置 / 東京

### [ 受賞・助成 ]

2024年　令和６年度 咲くやこの花賞受賞

2021年　第34回ホルベイン・スカラシップ奨学生
公益財団法人 小笠原敏晶記念財団 助成
アーツサポート関西（岩井コスモ証券 ASK 支援寄金）助成

2020年　文化芸術活動継続支援事業（文化庁）採択
公益財団法人野村財団 助成
アーツ・ユナイテッド・ファンド（AUF）助成
京都市文化芸術活動緊急奨励金 助成
公益財団法人 小笠原敏晶記念財団 助成
アーツサポート関西（岩井コスモ証券 ASK 支援寄金）助成

2017, 2018年　アーツサポート関西（岩井コスモ証券 ASK 支援寄金）助成

2016年　第５回 新鋭作家展（川口市立アートギャラリーアトリア）優秀賞

2013年　ART IN THE OFFICE 2013（マネックス証券）受賞
アートアワードトーキョー丸の内 2013 / フランス大使館賞、オーディエンス賞
京都市立芸術大学作品展 2013 奨励賞

## 制作ドキュメント

2024年
4月9日(火) アトリエ訪問 (Super Studio Kitakagaya(大阪・北加賀屋))
4月27日(土)、6月15日(土) 石探しリサーチ (塩屋海岸、塩屋浜)

**【イベント】**

**ワークショップ「石探しピクニック」**

神戸市の塩屋浜にて、作品のモチーフとなる石ころを探し、作家と共にスケッチをするイベント。参加者は色彩豊かなお気に入りの石を見つけ、お手製のスケッチブックにボールペンで描写した。おやつ休憩を挟みながら、描いたスケッチと石を囲んで、参加者全員で鑑賞会も行った。

11月3日(日・祝) 13:00〜15:00
会場:塩屋浜(集合場所:JR塩屋駅)
料金:1,000円(スケッチブック・お菓子付)
参加人数:5名(+付添保護者2名)
※当初は11月2日(土)開催予定だったが、雨天のため翌日に順延。

**【展覧会】**

会期:11月17日(日)〜12月22日(日) 10:00〜18:00
会場:新開地アートひろば B1・ギャラリー

**【協働制作】**

**「海の石から大きな絵ができるまで」**

展覧会のメイン作品である絵画を参加者と共に描く協働制作。作品のモチーフは、野原が青森や京都、神戸市塩屋の海岸で収集した石のコレクションから、参加者が描きたい石を選択。石の模様や色彩、手触りを起点に、大小様々なサイズのキャンバスにアクリル絵具とメディウムを用いて着色した。最終的に111枚のキャンバスが合わさり、1作の大きな絵画として展示された。

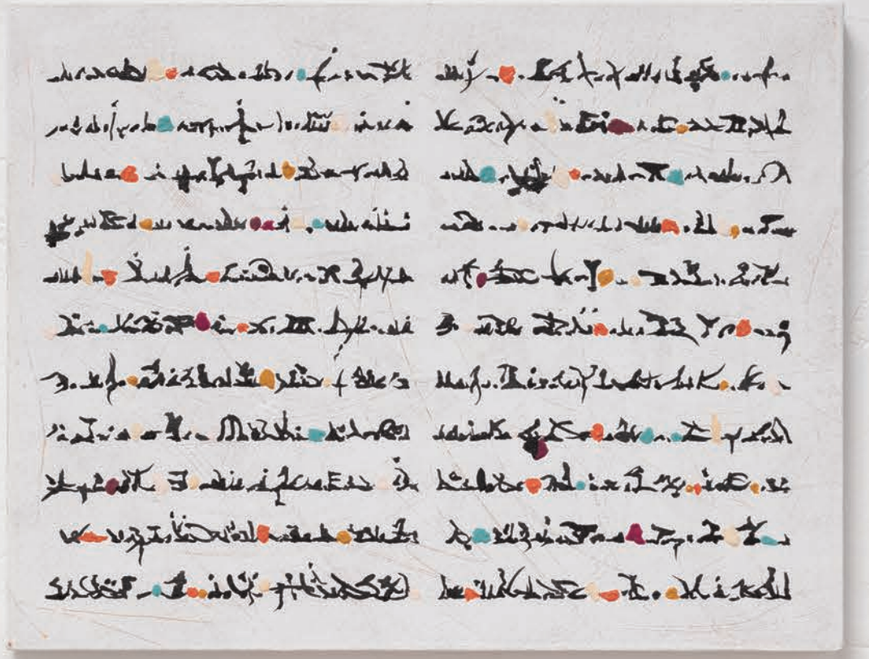
11月17日(日)〜12月22日(日)
開催日数:9日間
回数:17回
総参加者数:91名
会場:B1・ギャラリー内、展示会場中央

**【イベント】**

**アーティスト・トーク「石と人と絵」**

展覧会の印象的なエピソードや協働制作の様子、さらに過去の作品も交えて、野原の絵を描く際の考えや描き方について青木氏の質問形式でトークは進んだ。「人は何を考えているか、絵を通して考えている」と野原は語った。絵を描くことについてそれぞれの立場から触れた。

12月22日(日) 17:00〜19:00
出演:野原万里絵、青木加苗(和歌山県立近代美術館 主査学芸員)
会場:1F・1room
料金:500円(ワンドリンク・特典付)
総参加者:53名



## 展覧会

**ニューあそび場の創造 vol.12 野原万里絵展「絵画になるまで」**
The New Place to Play vol.12 Marie Nohara Solo Exhibition “Processes for paintings”

会期：2024年11月17日（日）～12月22日（日）10:00～18:00
休館日：火曜日
会場：新開地アートひろば（B1・ギャラリー）
料金：入場無料
主催：新開地アートひろば［指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団］

出展作家：野原万里絵
企画担当：横山春乃、岡村有利子、岸本紗和（新開地アートひろば）
デザイン：髙橋静香（KUSUNOKI WORKS design）

## 記録集

編集：横山春乃、岡村有利子（新開地アートひろば）
デザイン：髙橋静香（KUSUNOKI WORKS design）
作品撮影：表恒匡
印刷・製本：有限会社 修美社
発行：新開地アートひろば［指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団］
〒652-0811 神戸市兵庫区新開地5-3-14
TEL：078-512-5500　FAX：078-512-5356
展覧会HP：https://s-ah.jp/events/11494/
発行日：2025年3月

©2025 新開地アートひろば
※無断での転載転用は固くお断りいたします。

## 謝辞

展覧会開催及び、本記録集刊行にあたりまして、多大なご協力を
賜りました下記の方々、関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。

野原万里絵

青木加苗
（和歌山県立近代美術館 主査学芸員）

阿部奏恵
石田純司
岡村英子
重成二郎
寺井めぐみ
永原清史
西澤真智子
藤井真理
藤井操
吉川利江子
渡部充博

〈協働制作参加者〉

コマツミスズ
コマツモモカ
和田直子
猪口雅夫
Y.N
中村紗掬
山下悟
上村美和
上村碧馬
あきと
けいと
めいめい
りゅららのあ
うーちゃん
ここ
西村知紗
なみこしらく
えんぴつ
YN
田中智之
みずき
林淳子
HN
市子
久保昌由
しずか
中川恵理子
コウレイエイ
こころ
響
りいな
あおい
こうへい
金山絵美
金山蓮禾
ナギ
レイ
マリコ
さくら
ナガちゃん
岡本有桜
山中一正
ここね
ちーちゃん
Y.O
しーちゃん
T.N
さら
たいち
たまちゃん
Tex
おーぴー
タカダミユキ
ゆず
いく
みか
ポコ
はっちゃん
ねねたろう
あこりん
すーちゃん
戸田陽子
K・K
ともき
K.I
K.A.
M.H.

（敬称略、順不同）

新開地アートひろば